関ケ原一

司馬遼太郎全集14

司馬遼太郎全集 第十四巻
第十七回配本 関ケ原一
定価 一八〇〇円

昭和四十七年八月三十日第一刷
昭和五十六年十二月一日第六刷

著者 司馬遼太郎
発行者 杉村友一
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(代表)〇三二二六五一一二一一

印刷所 大日本印刷
製本所 大口製本
製函所 トーシキ

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© RYOTARO SHIBA Printed in Japan

馬遼太郎全集14

ケ原一

文藝春秋

司馬遼太郎全集第十四巻

関ケ原　一　5
司馬遼太郎の世界　尾崎秀樹　501

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

装幀　三井永一
題字　中田　功
AD　粟屋　充

関ヶ原　一

高宮の庵

いま、憶いだしている。

筆者は少年のころ、近江国のその寺に行った記憶がある。夏のあついころで、長い石段をのぼって行った。何寺であったかは忘れた。

寺の縁側にすわって涼を入れると、目の前に青葉が繁っていたことが、きのうのようにおもいだせる。そのむこうにひろびろとした琵琶湖畔の野がひろがっていた。

「わしがいますわっていることに」

と、私どもをここまで連れてきてくれた老人が、縁側の板をトントンとたたいた。老人は、身ぶり手ぶりをまじえて、私ども少年たちに寺伝の説明をしてくれた。

「太閤さんが腰をおろしていた。鷹狩りの装束をなされておった。その日も夏の盛りでな。きょうのように眼に汗のしみ入るような日中やった」

と、老人は汗をぬぐった。町のおとなたちはこのひとを「かいわれさん」と呼んでいたが、なんという姓のひとだったかは、その当時から知らなかった。

老人は、洋日傘と、扇子を一本もち、糊のきいたちぢみのシャツとズボン下の上に、生帷子の道服じみたものを一枚身につけている。

「茶を所望じゃ」

と秀吉がいったという。寺の奥で声がし、立ちあらわれたのは、当時この寺の小僧であった石田三成である。

余談だが、この俗伝は、少年雑誌などの絵物語などに載っていて、老人からきくまでもなく私どもはよく知っていた。

いま、関ケ原という、とほうもない人間喜劇もしくは「悲劇」をかくにあたって、どこから手をつけてよいものか、ぼんやり苦慮していると、私の少年のころのこういう情景が、昼寝の夢のようにうかびあがった。ヘンリー・ミラーは、「いま君はなにか思っている。その思いついたところから書き出すとよい」といったそうだ。そういうぐあいに、話をすすめよう。

この老人が話してくれた三成の小僧時代の話は、「武将感状記」などにのっている。かれの在世当時から、相当世にひろまっていた挿話であろうとおもわれる。

当時秀吉は、信長の部将として近江長浜二十余万石に封ぜられ、はじめて大名になったころである。

領内で、鷹狩りをした。鷹狩りというのは領内の地形偵

察と民情視察をかねた目的のあるもので、秀吉もそのつもりでいる。

だけではない。かれの場合、にわか大名であるだけに、二十余万石の軍役をまかなうだけの武士を抱え入れなければならなかった。鷹狩りをしながら、獲物の鳥獣などよりも、領内でしかるべき人材はいないか、ということのほうが関心ふかかったであろう。秀吉譜代の大名といわれる加藤清正、福島正則、藤堂高虎らは、ほとんど秀吉のこの時に召しかかえられている。

さて、三成は。

幼名、佐吉といった。近江坂田郡石田村に住む地侍石田正継の次男で、このころ寺に入れられていた。一書には学問修業のためにこの寺に通っていたともいい、一書には、寺小姓であったともいう。

十代のはじめごろであった。

きりっとした顔だちで、よく動く涼やかな眼をもっている。たれがみても眼に立つほどの少年だった。

秀吉は、このあたりまで鷹狩りにきて、のどのかわくあまり、いきなり入ってきたらしい。

「茶を点じて参れ」

と、縁側に腰をおろした。

佐吉は奥で茶の支度をした。この少年の父正継は農村にかくれているとはいえ、代々の地侍で、家計は豊かであった。身なりはわるくなかったであろう。

やがて、静かにもっていった。秀吉は蟬しぐれのなかに腰をおろしている。

「粗茶でござりまする」

とさしだすと、秀吉はいそいで飲み、

「さらに、一ぷく」

と佐吉に命じた。その最初の茶碗は、「武将感状記」に、「大いなる茶碗に、七、八分にぬるくたてて持ち参る」とあり、秀吉これを飲み、舌を鳴らし、「気味よし、さらに一服」と命じたという。乾ききっているから、むさぼり飲んだのである。そのための湯の量といい温度といい、ちょうどよかった。

「かしこまりましてござりまする」

と佐吉ひきさがり、こんどは湯をやや熱くし、その量は最初の半分ぐらいにした。

秀吉は飲みほし、さらに一服、と命じた。このころから、この少年、使える、とおもって観察しはじめていたのであろう。

三度目に運ばれてきたものは、容器も小茶碗である。それに湯の量はほんのわずかで、舌の焼けるほど熱かった。秀吉はこの少年の頓智に感心し、

「そちは、なんという」

とたずねた。佐吉は切れ長の眼を伏せ、
「御領内石田村に住まいまする石田正継が子にて、佐吉と申しまする」
と答えた。
（この児佳し）
と秀吉は、おもった。大人になれば使えるであろう。そのあと、二、三ものをたずねると、頭の反射がいい。いよいよ気に入り、寺の住持に頼んで城にもらいうけることにした。
この、秀吉と三成との最初の出遭いになった寺は、長浜城外の観音寺であるといい、伊香郡古橋村の三珠院だともいう。場所などどちらでもいい。

ほかに、こんな話がある。
実話とすれば、三成の二十歳前後のことであろう。
それまでは児小姓のようなぐあいで、かれの扶持は秀吉の直接経理からまかなわれていた。
「知行取りにしてやろう」
と秀吉はおもった。三成とおなじく秀吉手飼いの鬼小姓であった加藤虎之助（清正）は四百七十石、福島市松（正則）は五百石という知行をこの時期か、その前後に頂戴している。
「佐吉、そなたにも新恩五百石をあたえる。なお忠勤をはげめ。ついては所存があるか」
と秀吉がいった。
「古今武家盛衰記」のなかの三成は、平伏して礼を言い、「されば」と顔をあげた。
「宇治川、淀川に荻や葭（葦）がはえておりまする」
といった。
これら自生の植物を川沿いの郷民がほしいままに刈りとり、葭簀を作ったりさまざまなことに役立てている。三成はいう。その伐りとりに運上（税金）を取りたてる権利をくださるならば、五百石の知行は要らない、というのである。
ひょっとすると、三成が育った琵琶湖畔では、古来、湖の葭などを刈りとるのは領主に運上を出さねばならぬしきたりだったのであろう。
それにしても、そういうことに眼をつけるこの男は、よほど経済のわかる人物だったにちがいない。
「どれほどの運上がとれる」
と秀吉がおもしろがってきくと、三成はたちどころに計算し、
「一万石に相当いたしまする。さればその権利を頂戴しますれば、一万石の軍役をつとめまする」
といった。秀吉はこの男の頭脳に驚いた。
しかし、同僚の虎之助や市松は、まださほどの行政感覚をもちあわせず、戦場働きに専念している時期だったから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

（佐吉とはいやなやつだ。殿はなぜあのような者を可愛がられるのか）

とおもったであろう。

とにかく秀吉は、武功者も好きだったが、三成のような才能をとくに愛した。いつか、かれはいったことがある、

――三成はわしに最も似ている者だ、と。

「葭刈りに運上をとるなどということは古来きいたことがない。しかし、その案、なかなかおもしろくもある。しばらく様子を見るという意味でさしゆるしてやろう。ただし庶人に難儀のかからぬようにせよ」

と秀吉はいった。

三成は、さっそく、宇治川、淀川の川上から川下まで数十里のあいだ、自生している荻、葭を、

「一町につき、いくら」

という運上をきめ、在所々々の郷民に刈りとらせ、それを京大坂方面に売らせた。

大きな利を博した。

ある戦場に秀吉が出役したとき、むこうから軍勢がやってくる。団扇九曜に金の吹貫つけた旌旗を真先に持たせ、武具、馬具、華やかに鎧うた武者数百騎が、それぞれ金の吹貫を一本ずつ旗印として纏い、しずしずと押してくる。

「あれは見なれぬ旗じるしよ、敵か味方か、たずねて参れ」

と秀吉が使番（伝令将校）を走らせてみると、なんと河原の雑草の運上で人数をそろえた石田佐吉の隊であったという。

真偽はべつとして、三成ならありそうなことである。秀吉は三成のこういう才を愛し、朝鮮出兵のときなども、もっとも数学的頭脳を要する渡海運輸のことを主管させた。

船は四万艘ある。兵は二十万人。さらに馬や、兵糧、馬糧、硝薬、弾丸、矢。これらを輸送するのに、まず船の割りあてをし、ついで朝鮮へ送りとどけてから空船は対馬にさしもどし、そこからまた積んでゆく。空船が海上にいる時間をできるだけ少なくし、満船の回転をよくするには、満船、空船の速度、積みおろし時間、軍船と荷物船のかねあいなど、複雑な計算の基礎が要る。三成はそれをとどこおりなくやってのけたが、これだけの大軍を輸送するばあいの、これは世界戦史上の稀有な成功といっていい。

その才能の萌芽は、すでに少年のころの湯茶の温度のはなし、淀川の荻葭咄にある。

さて三成が、大名にとりたてられたのは、数え年二十三、四歳のときである。

これは、秀吉手飼いの小姓出身としては早すぎるほうではない。

十五歳で秀吉の小姓になった武辺者の加藤虎之助は、二十五、六歳で、一躍、親衛隊隊士からぬきんでられて肥後熊本二十五万石の大名になっているし、福島市松も似たような経路で伊予今治十万石をもらっている。この運命の変

化はべつだん魔法でもなんでもない。信長が死に、秀吉がにわかに天下取りになったからである。

三成の大名としての最初の石高は、右ふたりのかれの同僚よりも、身上が、はるかに小さかった。

四万石

であった。ただしその領地は、四国や九州の遠国ではなく、近江水口であった、近国というのは当時の大名として政治的にも経済的にも不利ではない。なににしても秀吉は自分の秘書官である三成を、手近におきたかったのであろう。

ところで、大名ともなれば多数の家来を召しかかえなければならない。

秀吉は殿中でふと、

「佐吉、そなたを大名に取りたててやったがその後、いかほどの家来を召しかかえたか」

とたずねた。

この近江者は、荻、葭で一万石の人数をととのえる、と言ったことのある男である。さだめし、思いもよらぬ才覚で分限以上の多数の家来を召しかかえたであろうと質問者の秀吉は期待した。

「一人でございます」

と、三成は意外なことをいった。この挿話が、「関原軍記大成」に出ている。

「一人とは何ぞ」とおどろき、秀吉はその一人の名をきくと、

「筒井家の牢人島左近でござりまする」

と三成はいった。秀吉はさらに驚いた。しかし思いかえして噴きだした。

「島左近は当代の名士だ。そちのような小身者のところには来るまい。うそだろう」

島左近は、かつて大和の筒井順慶の侍大将として合戦と謀略の天才といわれた男で、秀吉も山崎合戦のとき、順慶の使者として陣中にやってきたことを記憶している。

順慶のもとで一万石を食み、順慶の死後、筒井家が伊賀へ国替えになるときに、この左近は牢人した。

それが、どういうわけか近江の犬上川のほとり高宮郷というところで隠棲していた。高宮というのは、いまの彦根市街から南へ一里ばかりのところにある田園で、当時は森と川の美しい里であった。

——島左近が、高宮で庵を結んでいる。

ときき、大名に取りたてられたばかりの若い三成が、供を数人つれただけでその庵をたずねてみた。

かつては大和一国を領する筒井家の侍大将だった島左近は、三成の申し出に、当然、いい顔をしなかった。

「お手前が、それがしを、召しかかえくださると？」

と眼を見はり、やがて、

（やれやれ、世間知らずの若者めが。——大名になったら

れしさに何を血迷ってやってきたか）

と思った。茶でものませて追っぱらおうと思ったであろう。

庵のそばの犬上川では、小さな鮎が釣れたりする。釣りの話でもして、ほどほどに帰すつもりであったかもしれない。

左近は、体じゅうに戦場傷がある。その傷の一つ一つに、この戦国人の閲歴が埋められている。もっとも新しい傷は、天正十一年五月、伊勢亀山城に籠る滝川一益攻撃に参加したときの弾傷で、肉がはじけたためまだ癒らないでいる。

「いや、都からわざわざ訪ねてきてくだされてありがたい。家来にしてくださるか。あっははは、しかしそれがしも、もはや世間の事は倦み申したよ」

と、この永禄・元亀いらい天下にひびいた古豪は、実際の齢よりもひどく老けたことをいって、三成の分にすぎた申し出を、婉曲にことわった。

三成は、左近の風貌を見てからは、いよいよこの人物を惜しくなった。

「曲げてお願いつかまつりまする。貴殿をわが家来にするなど分にすぎた願いだとは百も承知しております。しかしそこを曲げて。――かようにお願い申しあげます」

と手をついて懇願した。

「家来になって頂くのが御無理ならば、いかがでありましょう、兄としてわがそばに居ってはくださるまいか」

「兄？」

島は、とりあわなかった。所詮は修辞で、主従ともなればそうはいかない。

三成は、懸命に口説いた。かれは秀吉の児小姓として仕えて以来、何度かの戦場を踏み、とくに秀吉の天下継承戦ともいうべき賤ケ岳の合戦では、加藤、福島など「七本槍」に次ぐ武功をたてている。

しかし、なんといっても戦場の血しぶきのなかでいきいきと働く駈け退き上手、というわけにはいかない。かれは自分の欠点を、島左近によって補おうとした。自分の吏才と左近の軍事的才能をあわせれば天下無敵とおもったのであろう。

三成はこの説得で、島左近を買おうというよりも、島に自分を認めてもらおうとした。むしろ、買われようとした。

「兄がおいやならば、よき友になってくだされ」

ともいった。こういう召し抱えかたは、古今未曾有であろう。

「それでどうした」

と、秀吉がいった。

「なにか、そちが手をうったな」

「はい」

と三成は落ちついていった。

「手というわけではござりませぬが、島左近ほどの者、容易なことではわが家に来てくれませぬ。そこで、上様から頂戴いたしましたわが知行のほぼ半分の一万五千石で召しかかえました」

「ほほう」

主従の知行にさほどの高下がない。秀吉は声をたてて笑った。三成の奇想が、いよいよ自分の若いころに酷似しているとおもって、この若者を愛する気持が深くなった。

三成は、これほどまでにして島左近を召しかかえたについては、ただ小成にあまんずる男でないことがわかるであろう。

若年のころから、大望を持つ男であった。むろんそれほどのかれも、後年、天下を二つに割って徳川家康と雌雄を決する大芝居を打つことになろうとは、この当時、考えてもいなかったであろう。

いや、あるいは、予想していたかもしれない。秀吉は天下を取っても、その天下を継承すべき子がなかった。

当然、秀吉の死とともに争乱がおこる。明敏な三成が、この点だけを考えたこともなかった、というのはうそである。

その証拠には、かれが島左近とともに築いた居城佐和山城をみればいい。

傲然として、近江の天にそびえている。

人と人

三成の佐和山城は、びわ湖畔にある。

ある、というのは資料で知っているだけのことで、筆者はその山をながく見たことがなかった。

東海道線で彦根を通過するとき、そのつど、

「このあたりに佐和山があるはずだが」

と車窓からその山をさがすのが、年来のくせになっている。ところが、視線というのは、ついあかるい方角に向いてしまうものか、東側の車窓つまり湖水を背景にしている彦根城のほうに視線がただよってしまい、いつも佐和山を逸してしまう。佐和山は、松と雑木におおわれている。汽車はその山腹をかすめて走る。つまり、彦根城が映ずる車窓とは、反対側にあるのだ。

そう気づき、

（そうだった）

とおもって背をひるがえしあわてて視線を転じたころには、もう汽車はその松と雑木の山腹を通りすぎてしまって

いる。

この稿を書くにあたって、私は佐和山を見ねば、とおもった。そこで岐阜を出発し、大垣を経、関ヶ原で下車し、古戦場で休息したのち、その関ヶ原町のふちをかすめている名神有料道路によって滋賀県境の山峡を越え、一望草遠い近江平野に入った。

湖がひかっている。

車を右へ右へ寄せてゆき、やがて彦根市内に入り、さらに市街地を出た。

佐和山が、ある。

いま東海道線のレールが走っている場所をふくめて、むかしは、びわ湖がこの山の裾まで蹙入してきていた。

湖水に裾をひたしつつ、悠然と湖東の天にそびえていたのが、往年の佐和山である。

（こういう山だったのか）

と私は、しばらく仰いだまま倦かなかった。すらりとした紡錘形の主峰をもち、ややそれよりもひくい峰々を従えている。

「これは搦手（城の裏）にあたります」

と、案内していただいたひとが、日傘をあげて説明してくれた。つまり、東海道線の車窓に、圧するがごとくして迫っているこの山容は、城でいえば裏側なのである。

おもて、つまり、大手門は、旧中山道を威圧し、鳥居本にある。

主峰は、湖面から一五〇メートルの高さで、その頂上がすぱりと切りとられて、その造成平坦地に、三成のころは五層の天守閣がかがやいていた。

古図でみると、すごいほどの巨城である。

天守閣をささえている石垣の高さが、二丈五尺あったという。

「鯱鉾など、曇り候時は、見へ不申候高さに候由」

と、古記にその驚きがつたえられている。

本丸を中心として、峰々に、二ノ丸、三ノ丸、太鼓丸、鐘ノ丸、法華丸、美濃殿丸、腰曲輪などの城壁をそびえさせ、いわゆる欧化築城法による。

大手門、搦手門のまわりには諸士の侍屋敷が押しならび、さらに城下町がある。いまは一望の田園でしかないが。

――

搦手門のそばを、湖の入江がひたひたと水を満たしていた。その入江のむこうに洲があり、洲までのあいだを、鍵の手に三折れした百間の橋がかかっていて、通称、

「百間橋」

といわれた。この橋は、実際の長さは百間以上で、すくなくとも五〇〇メートルはあったといわれる。

豊臣時代、この城は有名で、当時、

三成に
過ぎたるものが
二つある
島の左近と、佐和山の城

とうたわれた。

当時、近江の村々でうたわれた童謡ものこっている。手まりでもつきながら唄うのであろう。口ずさんでいると、拍子をとって唄っている村の童女のむこうに、壮麗な佐和山城がうかんでくるような気がする。

俺は都の者なれど、佐和山見物しよ〳〵
大手のかかりを眺むれば、金の御紋に八重の堀。まず
はみごとな掛かりかよ〳〵
御門を入りてこのまた掛かりをながむれば、八ツ棟造
りに七見角。まずはみごとなかかりかよ〳〵
よい城よ、みごとな城よ、堀ほりあげて関所を植えて、
関所に花が咲きしならばこの堀々は花ざかり〳〵

とにかく、これだけの城を造ったわりには、石田三成の大名としての身上は小さい。わずかに十九万四千石である。分不相応の城であった。なぜ、島左近ほどの者を召しかかえ、かつ天下有数の巨城をつくらねばならなかったか。

答えは、この城が、城内すべて壁は仕上げ壁をぬらず、土の色をむきだした粗壁のままだったというだけでもひきだせる。壮麗を誇るために城を築いたのではなく、実戦をつねに念頭に置いていた、ということが、この粗壁から容易に想像できる。

三成は、野望のもちぬしであった。佐和山城の起工は文禄四年で、秀吉の死のほんの数年前のことである。

左近が縄張り(設計)し、その設計図に三成が手を入れ、ふたりで相談しつくして、いわば合作でつくりあげたものであろうが、かれらはこの城をつくりながら、

「もし、太閤殿下がお亡くなりになれば、秀頼君はまだ幼い。当然、天下は乱れる。後継者をきめる戦いがおこる。そのときこそ中原にわれらの旗を樹てねばならぬ」

と話しあったことであろう。

佐和山城は、石田三成という男がいかに野心に満ちあふれた人間であったかを、あらわしている。

島左近が、近江高宮郷の庵に訪ねてきた三成をはじめて見たとき、

「豎子(小僧)」

という感じがした。

色が白く、眼がながく切れ、まつ毛がそろい、それがお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co